



地域から発信した小児の呼吸機能に関する研究

☆推薦文☆

八木先生は、四国の西の港町で自治医大の卒後義務を履行するなか、一つの疑問を抱き、仮説を立て、そして実証しました。さらにその論文がスペインの学会誌に掲載されました。八木先生は元来小児科医を志していましたが、多くの自治医大卒業生がそうであるように内科医として義務履行をしていました。そのような環境下でもモチベーションと小児科マインドを維持し続けたことが今回に結果に繋がったわけで特筆すべきだと思います。研究調査は地元の先輩小児科医の指導を仰ぎながら行われましたが、八木先生の真摯な姿勢とコミュニケーション能力、そしてバイタリティによるところが大きいと思われました。CRSTでは、自治医大呼吸器内科の坂東先生からいただいた示唆に富むアドバイスに沿いながら論文原稿を改訂しました。そして投稿した和文誌ではアクセプトされませんでした。ちょうど八木先生は別の研究で学位論文を英語で作成していましたので、いっそ本論文も英文に書き直してみるのもありかなと思ひ提案したのでした。CRSTの歴史の中でも、和文誌でリジェクトされた論文がIFの付く国際誌に掲載された例は聞いたことがないそうです。こうした義務年限中の派遣先での業績は、医学生や若手医師の素晴らしいお手本になるでしょう。

小児科学講座 熊谷 秀規

松山市民病院 八木 悠一郎 (愛媛県 35期卒業)

愛媛県35期の八木悠一郎と申します。この度、Clinical Research Support TEAM in JMU(CRST)の先生方のご支援をいただき、”Possible presence of undiagnosed asthma in children in Japan”というタイトルの論文がAllergologia et Immunopathologiaに掲載されました¹⁾。

データ収集から6年目、CRSTに支援を依頼してから2年半でのacceptとなりました。長期に渡りご支援を頂きました熊谷先生をはじめとするCRSTの方々にご場をお借りしてお礼申し上げます。

臨床、研究いずれの分野でも未熟者ではありますが、このような私でも外に向けて情報を発信することができました。このNews Letterの読者には私がそうであったように、これから論文を書いてみよう、あるいは論文を書き始めたが思ったように進まない方がいるのではないかと思います。私の経験がそのような方々のモチベーションを高めるきっかけとなれば幸いです。



●研究/論文作成のきっかけ

義務年限の4~5年目に内科医として勤務していた病院には小児科がありました。元々小児科希望だったので、勉強も兼ねて空き時間にお邪魔させていただいておりました。小児科の当時の上司の先生よりデータ収集の手伝いを依頼されたことが発端となります。

●論文概要

なんらアレルギー疾患の既往がないにも関わらず、意図せず呼吸機能検査異常を呈する児を経験しま

す。過去の報告を検討してみると未診断気管支喘息児の存在を示す報告が海外には複数あることがわかりましたが、日本人では潜在的な気管支喘息患者の報告がなかったため、「日本人小児においても未診断の潜在的喘息患者がいるのではないか」との仮説のもと、小学5年生の児童120名に対してアンケート調査、スパイロメトリー、呼気NO測定などを行いました。

解析を行ったところ、アンケートによってアレルギー疾患が一切ないとされた児のグループ内に(心疾患やアレルギー疾患以外の呼吸器疾患もない児)、25%の割合で末梢気道狭窄や慢性気道炎症を示唆する検査異常を持つ児がいることがわかりました。幼少時の呼吸機能障害が成人期の呼吸機能に影響を与えることも明らかとなっているため、こういった児への早期介入が有効であるかもしれません。5年後に同じ児童に再調査を行う予定であり、呼吸機能の変化などを再検討予定です。(本当であれば昨年が追加調査でしたが、COVID-19流行のため延期となりました。)

●論文作成からacceptまで

最初に投稿した日本語の雑誌はRejectであり大幅な書き直しが必要であると感じました。そのため、News Letterを拝見して兼ねてより興味のあったCRSTに支援を依頼いたしました。呼吸器内科坂東政司先生、小児科の熊谷秀規先生のアドバイスに加えて、松原茂樹先生の著書である「臨床研究と論文作成のコツ 読む・研究する・書く」を参考にさせて頂き修正を行いました。その後投稿した、別の日本語雑誌でもRejectであり、一旦は投稿を諦めかけていましたが、熊谷先生に「思い切って英文にして世界に発信してみてもどうか」とアドバイスを頂きました。英語には非常に抵抗がありましたが、アドバイスを頂きなんとか投稿にこぎつけました。1誌目はRejectでしたが、そこで頂いた指摘事項を修正して2誌目にトライしたところreviseを経てacceptされました。

Acceptまでの長すぎる道中で、何度も「諦める」という言葉が頭をよぎりましたが、仕事の遅い私にも熊谷先生が温かい、的確なアドバイスをくださったことがacceptの決め手であったと言っても過言ではありません。

●投稿を終えて学んだこと

- ・「どこまでがわかっている、どこからがわかっていないのか」は研究を行う上で根本的な考え方ですが、常日頃このような視点をもてるようになりました。
- ・当たり前ですが、思い立ったら早急に書き進めるのが一番だと思います。知識が新しい間に書き進めるのが一番効率的です。
- ・Reviseが求められたら、その一つ一つにできる限り誠意を持って対応する事が重要です。結果的にRejectになったとしても、次の投稿に良い形につながることができます。
- ・自治医大生は自身の県に戻ってしまうと圧倒的にマイノリティーになってしまいますので、色々な方との出会いが大切だと感じました。今回の私のように、出会いが新しい仕事のきっかけになることが多いのではないのでしょうか。誰から聞いたか定かではないですが、「若いうちは、頼まれた仕事は断らない」という考えでとりあえずトライすることが大切だと思います。

今回の経験を糧に、今後も臨床と研究に取り組めたらと思います。最後になりましたが、このような貴重な経験をさせて頂いた熊谷先生に重ねてお礼申し上げます。



(左)検査前診察の様子、(右)呼気NO測定の様子

地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープンラボ運営委員会
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7476/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<https://grad.jichi.ac.jp/>